

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：34412

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21518

研究課題名(和文) 個別の学習支援における自己制御メカニズムの解明 - 解釈レベル理論を用いた検討 -

研究課題名(英文) Examination of self-control mechanism in learning support -From the perspective of Construal Level Theory-

研究代表者

安達 未来 (Adachi, Miki)

大阪電気通信大学・共通教育機構・講師

研究者番号：50733789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学生の自己学習力(自己制御)を高め、彼らへの学習支援を効果的なものにするためのメカニズムを明らかにした。特に、支援者と学生との個別学習支援に焦点をあて、解釈レベル理論に関する知見からのアプローチを試みた。その成果として、まず解釈レベルの個人差が、学習に関連する変数と関連をもつことが調査、Web調査を通じて示された。そして、支援者と学生の2者間の相互作用における認知のずれや乖離を縮小させるためには、学生の解釈レベルに応じ、支援者の介入のあり方を調整することが有用であることが明らかになった。シナリオ実験、Web実験、また2者間相互作用の参与観察、支援者へのインタビューから示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、解釈レベル理論の考え方を、事例を用いたケーススタディを通じ、より実践的に応用させることができた点にある。量的データの分析に加え、半期以上にわたる継続した複数のケースを取り上げ、具体的な支援法とそれに伴う2者の変化を、学生の特徴を抽出しながら質的に分析することができた。また、支援者が学生のニーズ、特質、理解度を見極め、彼らの個人特性によっても支援者の介入のあり方を調整する必要があることが示された。このように、自己制御に対する解釈レベルの効用が、個人差により異なることが示されたことは、より実態にもとづいたフィールドへの視座を与えた。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the mechanism to improve self-regulated learning (self-control) of university students and make learning support for them effective. This study focused on individual learning support between supporters and students, and an approach based on Construal Level Theory. As a result, it was shown through surveys and Web surveys that individual differences in construal level were related to variables related to learning. Then, in order to reduce the cognitive gap and discrepancy in the interaction between the supporters and students, it is clear that it is useful to adjust the supporter's intervention according to the student's construal level. This was demonstrated by scenario experiments, web experiments, participation observation of interaction, and interviews with supporters.

研究分野：社会心理学, 教育心理学

キーワード：自己制御 解釈レベル 学習支援 仮想的有能感

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学教育の質的転換として、“学生が主体的に問題を発見し解決していく能動的な学習”が求められている(文部科学省中央教育審議会, 2008, 2012)。これまで、数多くの大学で学生の主体的な学習を促すためのさまざまな教育活動が推進されてきた。例えば、ラーニングコモンズが開設されたり、正課授業外での学習を支援する体制(ライティングセンター、学習支援センターなど)が整備されたり、などである。特に、多様な学生のニーズに応じた学習支援は、大学教育の質保証を果たすうえでも急務の課題であり、個別の支援が求められることも多い。そのため、支援者(教員、TA、チューターなど)と学生の1対1の学習支援において、いかにして個に応じた支援を充実させ、大学生の自己学習力(自己制御)を高めるべきか考える必要がある。

個別の学習支援では、常に1対1での対話が求められる。これに加えて、学生の特質、ニーズ、理解度に合わせた支援が必要とされる。個別の学習支援において、2者間の相互作用を円滑に進めることは学生の自己制御を促す。支援者が一方的に指示を出し知識や技能をただ話すのではなく、双方向の営みとすることで、学生は自らの学習をコントロールしていくことができる。このためには、支援者が学生のニーズ、特質、理解度を的確に見極め、それに応じて支援を行うことが必要となる。

しかし、支援者-学生の2者間の認知がそれぞれ異なるというケースは決して少なくない。従来、学習支援について国内外で実践的な効果検証の成果や知見が蓄積されてきた。一方、“指導をしてもその成果が見えにくい”などを訴える支援者は少なくない。2者間での相互作用には、しばしば認知のギャップや乖離が生じる。この不一致を解消するための一つの方策として、本研究では解釈レベル理論を用いたアプローチを提案した。解釈レベルには、達成目標(学習 vs. 解決)、時間的展望(遠い vs. 近い)、自己認識(他者のため vs. 私のため)など学習支援と密接にかかわる特徴が含まれている。本研究は、自己学習力という実践的なテーマを、解釈レベル理論を用いて検討するものである。

個別の学習支援において支援者が重視する点に、メタ認知方略の指導がある。単純な反復や課題への表層的な解決ではなく、何ができるようになったか、どこでつまづいたか、など自らの理解度をふりかえりモニタリングすることである。学習に対し副次的な要素に焦点をおき、近い将来を意識しがちな学生に対し、メタ認知をふまえ学習の本質を理解させ、遠い将来を意識させるために、2者間の認知の不一致を俯瞰する立場から、支援者の具体的な働きかけの方策を明らかにしていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学生の自己学習力(自己制御)を高め、彼らへの学習支援を効果的なものにするためのメカニズムを明らかにすることである。特に、支援者と学生との個別の学習支援に焦点をあて、解釈レベル理論に関する知見からのアプローチを試みた。

(1) 他者による解釈レベルの調整が個人の自己制御を促すメカニズムの検討

解釈レベルの個人差である BIF(Behavior Identification Form)と目標志向、学習観、学習方略の利用、先延ばしの学習関連変数との関連を明らかにする。続いて、2者間での解釈レベルの一致・不一致が自己制御に及ぼす影響を検討する。

(2) 個人特性に応じた解釈レベルの調整が自己制御に及ぼす影響とそのメカニズムの検討

2つ目の目的は、解釈レベルと自己制御の関連が、学生のさまざまな特質によってどのように調整されるかを明らかにすることである。

(3) 実践的アプローチ

3つ目の目的は、上記の実証的知見の妥当性を高めるため、個別の学習支援における応用可能性を参与観察およびインタビューを通じ明らかにしていくことである。

3. 研究の方法

大学生、高校生に対して、解釈レベルの個人差 BIF や学習に関連する諸変数を測定するために、質問紙調査および Web 調査・実験を実施した。また、シナリオを用いた質問紙実験ならびに Web 実験を実施した。

加えて実践的アプローチとして、大学の学習支援センターを対象のフィールドとし、学習支援センターにおいて、支援者-学生の2者間相互作用の観察、参与観察、支援者へのインタビューを通じた質的分析、複数のケーススタディを実施した。

個人特性に応じた解釈レベルの調整が自己制御に及ぼす影響とそのメカニズムの検討にあたり、全国の大学生、高校生に対し、個人特性と学習に関連する諸変数を測定するための Web 調査を実施した。また、シナリオを用いた質問紙実験ならびに Web 実験を実施した。さらに、授

業内での縦断調査（授業開始時・授業終盤時）を実施し、個人特性と学習の変化を分析した。これについても、個人特性を測定するための質問紙および Web 調査を実施し、大学の学習支援センターやライティング支援の利用状況を分析しながら、支援者 - 学生の 2 者間相互作用の観察、参与観察、支援者へのインタビューを通じた質的分析、複数のケーススタディを実施した。

4. 研究成果

まず、解釈レベルの個人差が、学習に関連する諸変数と関連をもつことが示された。そして、学生と支援者の 2 者間の相互作用における認知のずれや乖離を縮小させるためには、学生の解釈レベルに応じ、支援者の介入のあり方を調整することが有用であることが明らかになった。

次に、個人特性に応じた解釈レベルの調整が自己制御に及ぼす影響とそのメカニズムの検討についてである。解釈レベルの調整が自己制御に及ぼす効用は、学生の有能感の違いによって異なることが示された。具体的には、有能感の高い学生に対しては、高レベル解釈を促すことの有用性が認められた一方で、有能感の低い学生においては低次の解釈による効用が認められた。つまり、支援者は学生の有能感（自信）の高さに違いによって、介入のあり方を調整する必要があるといえる。これは、実践的アプローチとして、支援者 - 学生の 2 者間相互作用への参与観察においてもみられた傾向である。

さらに、学習支援センターやライティング支援においても、学生のレポートや課題に対する自信、学習観、日頃の学習方略の利用、さらには失敗観、テスト観の違いによって、支援者の介入は異なる教育効果をもたらすことが示された。対象となるフィールドにおいて、学習支援のなかでも特にライティング（レポートの書き方）に関するケースが増加したこともあり、ライティング教育への新たな示唆も得ることができた。今後は、学生の個人特性に応じて、ライティングへの添削指導とルーブリック指導の効用を明らかにしていく予定である。

加えて、学生の学習に関連しない個人特性にも着目した。具体的には、解釈レベルの知見をもとに支援者との心理的距離の近さ・遠さ（授業開始時と授業終盤時における 2 者間の心理的距離の変化）、親密さ、拒絶感受性、孤独感、仮想的有能感をとり上げ、これらの個人特性が学習の変化や自己制御にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、仮想的有能感の高い学生と支援者との相互作用に、孤独感が関わっていることが示された。具体的には、仮想的有能感が高い者にとって、孤独感の高さが 2 者間の相互作用を困難にすることが示された。

この結果は、当初検証を予定していた 2 つの個人特性、有能感および自律性を用いた結果ではないものの、学習の変化や取り組みに対し、2 者間の関係性（拒絶感受性、孤独感、仮想的有能感）の影響が有意な影響をもつことを追証する。今後、個人特性の違いによって 2 者間の相互作用の質が異なることを視野に、さらなる支援法を開発していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 安達未来・大西理恵子	4. 巻 -
2. 論文標題 サポート(修学支援)「大学での学修を円滑にするために」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2019年度 スポーツ強化センタ年次報告書	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安達未来・大西理恵子	4. 巻 55
2. 論文標題 大学での学び方(スタディスキル)の定着・向上を目指す学習支援の取り組み - 講義マスターへの道 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪電気通信大学 研究論集 自然科学編	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Terada Miki, Adachi Mana, Okawara Namiko, Mayuka Shimizu, & Nishiwaki Nozomi	4. 巻 4
2. 論文標題 Analysis of Types of Students who Study in the Learning Support Center : A Proposal for an Approach in Peer Supporter Training Program	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Research and Pedagogy	6. 最初と最後の頁 183-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 寺田未来・浦光博	4. 巻 18
2. 論文標題 対人環境および自己調整学習が学校生活に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大手前大学論集	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田未来・川本大史	4. 巻 8
2. 論文標題 Rejection sensitivity, self-efficacy, and learning strategy: Mediating and moderating the role of basic needs satisfaction.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psychology	6. 最初と最後の頁 449-462.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/psych.2017.83028	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 寺田未来	4. 巻 18
2. 論文標題 受講者の特徴やファシリテーターの意図に着目した ピアチューター研修の実践報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校心理学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田未来	4. 巻 8
2. 論文標題 Effect of individual differences in construal level on procrastination: Moderating role of intelligence theories.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Psychology	6. 最初と最後の頁 517-525
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.4236/psych.2017.84032	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田未来・池村優一・柏原康人・福嶋ゆい・中川和亮・中島梓	4. 巻 -
2. 論文標題 学習支援センターにおける支援事例から自主学習支援のあり方を考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大手前大学CELL教育論集 第7号 37-46 2017.3	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安達未来・福島ゆい・安達啓介
2. 発表標題 ループリックと添削の評価の違いが大学生のライティング能力に与える影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺田未来・金森啓介
2. 発表標題 大学生の授業参加意欲と教員との心理的距離との関連
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺田未来
2. 発表標題 対人感受性や疎外感が学習に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺田未来
2. 発表標題 解釈レベルと目標志向が態度変化に及ぼす影響 レベル調整の有効性に着目して
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺田未来・福嶋ゆい・中川和亮・中島梓
2. 発表標題 他律から自律を促す学習支援とは分野越境から実践をふりかえり諸理論とのリンクを試みる
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺田未来・川本大史
2. 発表標題 好奇心の高さが自己調整学習に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺田未来
2. 発表標題 自己調整学習方略の利用に対する「解釈レベル理論」からの考察
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 寺田未来
2. 発表標題 自己調整学習方略の利用におけるメタ認知の働き - 解釈レベルに着目した検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----